

荒川好子

初級・初中級の日本語学習者間の会話における能動的に聞く 技術の指導の有効性

要旨：日本語会話の教室活動において「話す」ことではなく、「聞く」ことに着目し、話し手の発話を促す能動的な聞き手の技術の指導の有効性を述べる。学習者の「たくさん話したい」という希望をかなえ学習満足度の向上を目指すために、学習者間の会話の回数を増やすことを提案する。また、学習者間の活発な会話の継続を促すためにあいづちの学習を導入し、日本語会話の特徴と言われる「共話」を軸に初級・初中級学習者のコミュニケーション能力の向上を図る。

キーワード：日本語会話、共話、聞き手ストラテジー。

Yo. Arakawa

Didactic potential of using active listening skills in conversations between beginner and pre-intermediate learners of Japanese

Abstract: *It can be assumed that in Japanese conversation classes, it is effective to focus more on listening rather than speaking skills, as active listening encourages dialogue. Increasing the number of conversations between students satisfies students' desire 'to talk a lot', however, the Japanese conversation is characterized by 'kyowa' (co-construction). Practicing kyowa helps improve communication skills of elementary and pre-intermediate learners of Japanese. To facilitate the continuation of lively conversations between students, it is important to introduce a listener strategy – 'aizuchi'.*

Key words: *the Japanese conversation, kyowa (co-construction), listener strategy.*

日本語母語話者が担当する日本語会話の授業で学習者はできるだけ多くの自由会話の機会を求めている。担当教員の内省を通じた日本語会話の授業改善を目的として 2022 年にサンクトペテルブルク国立大学東洋学部日本学科の教師、在校生

、卒業生を対象に行われたアンケート調査では、「もっとたくさん話したい」という学生の声が多く見られた〔Аракава 他, 2023〕。この結果を受けて、同校では日本語会話の授業における学習満足度の向上を目指すため、授業の初めの 10 分程度で行える教室活動における自由会話の量を増やす工夫を続けている。しかし、1 対複数人という教師と学生の会話では、授業内の各学生の発話量を増やすことは難しい。そこで、同校の 1 年生と 2 年生の会話の授業では、同じ話題で相手を変えて何度か繰り返すことで会話の回数を増やす活動を行っている。つまり、もっと話したいという学生の希望をかなえるために聞き手を増やし、回数によって会話量を増やす試みである。この方法は、大勢の前で話すという緊張を緩和することができ、また、相手を何人か変えることでレベルの差による不満や不公平感を軽減し、何度も同じ話を繰り返すことで間違えやうまく会話が運んだときの成功体験に学生自身が気づくことができ、反復による発話の滑らかさの促進が期待できる。

しかし、学習者間の自由会話では、会話が長く続かない事例が散見される。では、話したいのに話せないのはなぜだろうか。

その要因として、第一に「話を聞いてくれない、質問してくれないから話せない」ということがあるだろう。日本語会話に限ったことではないが、聞き手がいなければ会話や対話は成立しない。特に、日本語の場合は、大塚が指摘するように「日本語の会話の特徴は共話にあり、それが成立するためには聞き手の言語行為が重要な役割を持つ」としている〔大塚, 2019, 283〕。宇佐美によると、「共話」とは、水谷信子の造語で、「『聞き手が積極的に話し手に協力する』協調的会話スタイル」で、文の共同完結、あいづちの多用、話者による文の意図的な未完結などの特徴を有し、欧米型の「対話的な」話し方と対照的なものである〔宇佐美, 2006, 103〕。

第二の要因に、教科書の「作られた会話文」と自然会話の違いの問題が挙げられる。宇佐美は「教科書の会話と自然会

話が違おうと言う印象を与えているのは、発話文自体ではなく、むしろ、オーバーラップや文の途中の頻繁な話者交代というような『やりとり』のほうであり、それこそが「自然なコミュニケーション」を構成している重要な要素であることがわかるのである」としている〔宇佐美, 2012, 19〕。日本語母語話者との接触が少なくまだ学習歴が浅い外国人学習者の「お手本」とする会話は、主に教科書の「作られた会話文」であり、共話が日本語の特徴であるにも関わらず、教科書の会話文は、聞き手の能動的な言語行動の明示が最小限にとどまっている。Suzuki and Usami は、共和 (co-construction) は英語よりも日本語でより頻繁に発生すると述べ、特に共話が友人間よりも非知人間でより頻繁に発生していることから、日本語では共話が非知人の間で肯定的な礼儀正しさを示すための好ましい手段の1つとして使用されていることを示唆していると指摘している〔Suzuki and Usami, 2005, 273–274〕。このように、共話の意識化は日本語学習者のポライトネス・ストラテジーのひとつとして社会言語能力の育成にも大きく影響する重要な指導項目であることがわかる。

さらに、学習満足度の向上とより活発で自然な日本語会話を目指し、能動的な聞き手の育成が有効であると考えた。教室内の各学生がより能動的な聞き手になれば、会話の相手の発話が促され、会話量も増えるはずである。舛田は、会話を円滑に進めるために聞き手が用いる手段を「聞き手ストラテジー」として、下記を挙げている。1. 情報要求のストラテジー (a 話題転換の情報要求、b 話題展開の情報要求)、2. 共有表明のストラテジー (a あいづち、b 理解表明、c 意見・評価)、3. 聞き手自身の理解促進のためのストラテジー (a. 確認チェック、b. 明確化要求)、4. 話し手に対する発話援助のストラテジー (貢献・完成)〔舛田, 2008〕。舛田の例に倣い、ロシア人学生を対象にした授業で具体例を示した。次に一部紹介する。1a ところで、そういえば、昨日ネットで見たんだけど、1b 今日の授業は会話と？、2a へえ、ええ！そうですか、そうなんですか etc.、2b なるほど、確かに！、2c かわいい

！大変ですね、わかるわかる！あるある！、3a 相手の言葉を繰り返す聞き返し、そうでしたっけ？、3b え？○○って？、4a（昨日友達の誕生日にしょ・・・）招待されました。

あいづちの例に関しては、独自にリストを作成し書面の配布とパワーポイントによる提示を行った。特に、『つたえるはつおん』という WEB ページの中川の企画による「あいづちを練習しよう」というビデオがあいづちの有用性を訴えるために有効であった [中川, URL: <https://www.japanese-pronunciation.com/jpn/movie/emotion3/>]。

以上のことから、能動的な聞き手の技術の指導として、1 共話という日本語の特徴、2 教科書の「作られた会話」と自然会話の違い、3 会話において能動的な聞き手の役割の重要性、4 聞き手ストラテジーの意識化が重要であり、学習者間の会話の促進が大学教育における初級・初中級の日本語会話の授業における学習満足度向上の鍵であると考えられる。

参考文献

1. 宇佐美まゆみ「話し手と聞き手の相互作用としての「共同発話文」の日英比較：「共話」，「Co-construction」現象の再検討」『高見澤孟先生古希記念論文集』高見澤孟先生古希記念論文集編集委員会.- 2006. - P. 103-130. - DOI 10.15084/00003428.
2. 宇佐美まゆみ「母語話者の日本語会話」『コミュニケーションのための日本語研究』.- 2012. - P. 13-20. - DOI 10.15084/00003585.
3. 大塚明子「会話力を向上させる聞き手のストラテジーとは」『2019年度日本語教育学会春季大会予稿集』.- 2019. - P. 283-288.
4. 中川千恵子「あいづちを練習しよう」『つたえるはつおん』URL: <https://www.japanese-pronunciation.com/jpn/movie/emotion3/> (最終閲覧日 29.04.2023)
5. 柳田直美「<研究論文>中国人学習者に対する「聞き手ストラテジー」指導の効果：授業活動と日本語母語話者の対中国人学習者評価から」『筑波大学留学生センター日本語教育論集 23』.- 2008. - P. 15-30.

6. **Suzuki, T.** Co-constructions in English and Japanese revisited: A quantitative approach to cross-linguistic comparison / T. Suzuki, M. Usami. – Текст : непосредственный. // 9th International Pragmatics Conference, Riva del Garda, Italy. – 2005. – P. 263–276.
7. **Аракава, Ё.** Анкетирование студентов как основа модернизации и повышения качества преподавания разговорного аспекта японского языка в СПбГУ: применение результатов анкетирования для рефлексивной практики преподавателей / Ё. Аракава, И. С. Ибрахим, Р. Охира // Японский язык в вузе: актуальные проблемы преподавания : материалы международной научно-практической конференции (октябрь, 2022 г.) / отв. ред. Л. Т. Нечаева. – Москва : Ключ-С, 2023 – Вып. 25. – С. 15–23. – Текст : непосредственный.